２０２７

グラフィックデザインで考える「繋がり」

Graphic Design for “the relationship”

AD 31　根岸　真由実
指導教員　佐久間　善典

1.研究目的

インターネットの普及により、地球の裏側とでも一瞬にして「繋がる」ことができるようになった現在。しかし、人と人との繋がり、触れ合いは薄れていってはないだろうか。それは目指すべき「繋がり」だろうか。改めて「繋がり」について考え、グラフィックデザインで学んだことを活かし、それを効果的に伝える方法を探すこと。

2.調査と分析

「繋がり」には種類がある。生まれつきのもの、そうでないもの。直接的なもの、間接的なもの。身近でわかりやすいもの程、それ故に見失いやすいのではないだろうか。

人は産まれてから死ぬまで、繋がりを増やしていく。しかし、1 人で新しい繋がりを作ることはできない。一方通行ではなく、受け入れてくれる相手がいてはじめて、繋がりになるといえるだろう。

そして、直接自分が関わることのない繋がりも存在する。自然と呼ばれるものが大体それに当たるだろう。時間というのはその存在が、自分を含んだ全てのものに影響を与える、とても大きな繋がりなのだと思った。

3.コンセプトの立案

これらの「繋がり」の何を、誰にどうやって「伝える」か。伝えたいことは、現在における繋がりについての問題提起。内容としてはごく身近な疑問から、実際に問題になっていることまでを扱いたい。

しかし、それは「受け取り手」にとって極端に重いものではいけない。また「受け取り手」は、なるべく広い層へ設定すること。
幅広い層に伝えやすく、重くなりすぎないという点で、写真に重点をおいた「本」を作ることにした。
本の場合、最終的な繋がりは読者がその本から受け取るモノ。

その本を編集することで、内容と構成から「繋がり」を考える。そして、本が伝えられることの可能性も考えられるのではないか。

4.デザイン展開

本というのは、それ自体が「繋がり」でできている。それを活かす為に「続き物」の本にした。共通点は写真と文章。繋がりについて、違うテーマを持った三冊の本を、同じ写真、同じ文章で繋げる。

写真を活かす為に、紙面や文字の色にも気をつける。

5.完成図

6.結論

「繋がり」とは関係性であり、それは時に対比でもある。人が生きていくうえで、自分と、自分以外のものとの間にあるもの。

人は血の繋がりだけを持って生まれて、そこから新しい繋がりを作っていく。誰か(何か)と出逢うごとに、知るごとに増えていく。繋がりとは、想いを伝え、また受け取ることではないだろうか。

それは、生きていくことそのもの。

私がこの本を作りながら達した結論はこうなった。
この研究の「受け取り手」が辿り着く結論は、それぞれ少しずつ違った形であって欲しいと思う。

7.参考文献

児童虐待：ゆがんだ親子関係
池田由子著(中央公論社)